

第9章 家庭とのつながりが少ない子どもにおける 「住民とのつながり」と「学習理解度」および「地域貢献意欲」の関係

大林正史（鳴門教育大学）

1. 研究の目的

本研究の目的は、家庭とのつながりが少ない子どもにおける、住民とのつながりと「教科への肯定的態度」および地域貢献意欲の関係を明らかにすることである。

露口（2016）は、社会関係資本と学習意欲の関連に関する先行研究をレビューし、子どもと家庭の社会関係資本は、学業成績、退学抑制、大学進学等に影響を与えることを指摘している。

志水・中村・知念（2012）は、子どもの社会関係資本は、学力を規定する他の要因（性別、家での学習時間、期待教育年数、学校外教育支出、経済資本、文化資本）を統制した上でも、学力への独立した正の影響力を有すること、また、その影響力の強さは、経済資本のそれに匹敵することを明らかにしている。

また、露口（2016）は、子どもの社会関係資本を、家庭の社会関係資本、子ども間の社会関係資本、学級の社会関係資本、地域の社会関係資本に細分化し、それらの社会関係資本が、子どもの「学習意欲」に与える影響を、子ども個人のレベルおよび学級レベルの両方から検討している。その結果、学級レベル・児童レベルでの子どもと家庭のつながりや、学級内での教師や級友とのつながり、および児童レベルでの子どもと地域とのつながりが、児童の「学習意欲」に影響を与えることが明らかにされている。

このように、先行研究では、子どもを取り巻く社会関係資本のうち、とくに子どもと家庭のつながりが、子どもの学習意欲や学力に影響を与えることが明らかにされている。しかし、学校や行政が、家庭に子どもとつながることを一律に要請することは、しばしば個別の家庭の事情が考慮されないため、保護者を追い詰めることになりかねない（仲田 2015）。よって、学校や行政が、子どもと家庭のつながりを強めるように家庭に介入することは慎重さを要する。

一方で、近年、コミュニティ・スクールが普及するなど、学校と地域が連携を強める中で、子どもが住民とつながる機会が増えている可能性がある。だとすれば、学校と地域が連携することを通して、家庭とのつながりに恵まれない子どもが、地域とのつながりを構築することで、家庭とのつながりの不足を補うことができる可能性があるのではなかろうか。

この点について、志水・中村・知念（2012）は、経済階層が下位の層の家庭の子どもほど、社会関係資本が学力に与える影響が増大することを明らかにしている。しかし、露口（2016）が指摘するように、志水・中村・知念（2012）の研究では、子どもの社会関係資本が細分化されていないため、「社会経済的背景が厳しい児童生徒が、そうでない児童生徒に比べ、地域とのつながりを有することが学力に与える影響がどの程度異なるのか」が十分に明らかにされてはいない。

また、上記の研究では、被説明変数として、学習意欲や学力が設定されてきた。しかし、日本青少年研究所は、2009年2月に発表した「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」の調査によって、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と思っている日本の高校生は、韓国・中国・米国の高校生に比べて、明らかに少ないことを明らかにしている。児童生徒が「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれな

い」と思えるようにするためにも、社会の一部である「地域に貢献する意欲」を高めることが重要なように思われる。

以上の問題意識から、本研究では、家族とのつながりが少ない子どもにおける、住民とのつながりと「教科への肯定的態度」および地域貢献意欲の関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査の方法

本研究では、露口（2016）で分析された質問紙調査の結果を再分析する。

質問紙調査は、A 県 B 市の調査協力校 9 校の第 3～6 名の児童 4,134 名に対して行われ、そのうち、4031 名からの回答が得られた。有効回収率は 97.5% であった。調査は、2013 年 11 月に、学校ごとに適切な日時を選択し、実施された。学校毎に調査票を郵送し、学級担任を通して、調査票の配布・回収を行った。分析の対象は、そのうち 1 校を除く 8 校に在籍している第 3～6 学年の児童 3,560 名である。

質問紙は、露口（2016）の言う「家庭ソーシャル・キャピタル（以下 SC）」、「学級 SC」「子ども間 SC」「学習意欲」「地域 SC」等を測る 50 の質問項目から構成されている。全ての質問項目について「ひじょうにあてはまる（4 点）」「ややあてはまる（3 点）」「あまりあてはまらない（2 点）」「まったくあてはまらない（1 点）」の 4 件法で尋ねている。

(2) 変数の設定

本研究では、児童と家族とのつながりを測る尺度として、「子ども—保護者 SC」を設定する。これは、露口（2016）の「家庭 SC」と同じ質問項目で構成される。「子ども—保護者 SC」得点は、次の質問項目の得点の平均値である。

- 「家族の人は、話をよく聞いてくれる」
- 「家族の人といっしょに遊んだり、運動をしたりする」
- 「家では、お手伝いをがんばっている」
- 「家族の人に、あいさつをしている」
- 「家族の人は、勉強のことについて相談にのってくれる」
- 「家族の人のために、役に立ちたいと思う」
- 「私の家族は、おたがいに協力し、助けあっている」
- 「家族の人は、自分がこまっていたら助けてくれる」
- 「家族の人は、自分のことを大切に思っている」
- 「家族の人から期待されており、とてもうれしい」

また、本研究では、説明変数として、「住民とのつながり」、「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」を設定する。

「住民とのつながり」得点は、次の質問項目の得点の平均値である。

- 「地域のひと、学校の中でいっしょに活動することがある」
- 「今住んでいる地域の行事に参加している」

「地域のスポーツ団体や文化団体でがんばっている」

「地域のお年寄りの人からお世話になっていると思う」

「担任教師からの期待」は、「担任の先生から期待されており、とてもうれしい」の得点を用いる。これまでの「効果のある学校」研究においては、社会経済的に不利な家庭の子どもが多く集まる学校において、高い教育成果をあげている学校の特徴として、教師が児童生徒に対して高い期待を持っていることが明らかにされている（例えば、鍋島 2003）。そこで、この質問項目を説明変数に採用して、その影響の大きさを、「住民とのつながり」と比較する。

「他の児童からの支援」は、「学級では、自分がこまっていたら周りが助けてくれる」の得点を用いる。この質問項目は、露口（2016）では、「学級 SC」を構成する質問の一つである。露口（2016）は、学級内での級友とのつながりが、「児童の学習意欲」に影響を与えていることを明らかにしている。

次に、本研究では、被説明変数として、「国語への肯定的態度」（「国語の勉強が好きだ」、「国語の勉強は大切だと思う」、「国語の授業の内容はよく分かる」の得点の平均値）、「算数への肯定的態度」（「算数の勉強が好きだ」、「算数の勉強は大切だと思う」、「算数の授業の内容はよく分かる」の得点の平均値）、「理科への肯定的態度」（「理科の勉強が好きだ」、「理科の勉強は大切だと思う」、「理科の授業の内容はよく分かる」の得点の平均値）、「社会への肯定的態度」（「社会の勉強が好きだ」、「社会の勉強は大切だと思う」、「社会の授業の内容はよく分かる」の得点の平均値）、「地域貢献意欲」を設定する。

2014 年の全国学力・学習状況調査の児童用質問紙では、「国語の授業の内容はよく分かる」と、国語 A、国語 B の正答率の相関係数は、それぞれ 0.29、0.28 であった。「算数の授業の内容はよく分かる」と算数 A、算数 B の正答率の相関係数は、それぞれ 0.40、0.36 であった。これらの相関係数は、他の質問項目と算数、国語の正答率の相関係数よりも、比較的高かった。よって、本研究では、学力の代替指標として、各「教科への肯定的態度」を設定する。

「地域貢献意欲」得点は、「今住んでいる地域をよりよい地域にしたいと思う」「今住んでいる地域に貢献できるような大人になりたい」の得点の平均値である。

「地域貢献意欲」得点は、「今住んでいる地域をよりよい地域にしたいと思う」「今住んでいる地域に貢献できるような大人になりたい」の得点の平均値である。

(3) 仮説の設定

本研究では、次の仮説を設定する。

①家族とのつながりが少ない児童は、そうでない児童に比べ、「教科への肯定的態度」や、地域貢献意欲が低い。

②家族とのつながりが少ない児童は、そうでない児童に比べ、「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響が大きい。

これら①、②の仮説が支持されれば、家族とのつながりが少ない児童に対して、重点的に、住民とのつながりを構築し、担任教師が期待をかけ、他の児童からの支援を得られるような学級経営、学校経営をしていく必要があると言えよう。

3. 結果

まず、児童による全回答を、家族とのつながりが少ない児童の群（下位群）と多い児童の群（上位群）に分けた。「子ども—保護者 SC」得点の度数分布表をみると、25.6%の児童の得点が、3.1以下であった。また、21.7%の児童の得点が3.0以下であった。

一方、28.4%の児童の得点が、3.7以上であった。また、17.9%の児童の得点が3.8以上であった。よって、「子ども—保護者 SC」得点が3.1以下の児童を下位群、3.7以上の児童を上位群とした。

(1) 「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に関する下位群と上位群の比較

本研究の第1の仮説は、「家族とのつながりが少ない児童は、そうでない児童に比べ、「教科への肯定的態度」や、地域貢献意欲が低い」であった。表8-1は、家族とのつながり下位群と、上位群の児童における各変数の平均値の差を、変数の正規性や等分散性を考慮した上で検定した結果である。

表8-1 家族とのつながり上位群-下位群の差の検定

	家族とのつながり 下位群			家族とのつながり 上位群			t検定 結果
	平均値	S D	N	平均値	S D	N	
住民とのつながり	2.41	.72	888	3.14	.68	1345	***
担任教師からの期待	2.28	.93	900	3.37	.74	1357	***
他の児童からの支援	2.72	.91	895	3.63	.63	1358	***
国語への肯定的態度	2.80	.75	900	3.57	.47	1359	***
算数への肯定的態度	3.05	.79	901	3.65	.51	1359	***
理科への肯定的態度	3.18	.75	899	3.7	.49	1359	***
社会への肯定的態度	2.87	.84	898	3.57	.56	1356	***
地域貢献意欲	2.83	.87	895	3.68	.54	1352	***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表8-1から、家族とのつながりが少ない児童は、多い児童に比べ、「住民とのつながり」、「担任教師からの期待」、「他の児童からの支援」、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」が0.1%水準で有意に低いことがわかる。よって、第1の仮説は支持された。

(2) 家族とのつながり下位群の児童における「住民とのつながり」、「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響

本研究の第2の仮説は、「家族とのつながりが少ない児童は、そうでない児童に比べ、『住民とのつながり』、『家族とのつながり』、『担任教師からの期待』、『他の児童からの支援』が、各『教科への肯定的態度』、『地域貢献意欲』に与える影響が大きい」であった。本項では、まず、家族とのつながり下位群の児童における「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響について、分析する。

表 8-2 家族とのつながり下位群の児童における各変数の平均値・標準偏差・相関係数

	M	SD	N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 家族とのつながり	2.69	.40	902	—	.29 **	.32 **	.29 **	.35 **	.23 **	.23 **	.22 **	.36 **	-.09 *
2. 住民とのつながり	2.41	.72	888		—	.32 **	.31 **	.27 **	.26 **	.31 **	.31 **	.47 **	-.12 **
3. 担任教師からの期待	2.28	.93	900			—	.33 **	.30 **	.27 **	.28 *	.32 **	.37 **	-.17 **
4. 他の児童からの支援	2.72	.91	895				—	.32 **	.23 **	.23 **	.29 **	.34 **	-.01
5. 国語への肯定的態度	2.80	.75	897					—	.35 **	.37 **	.54 **	.40 *	.03
6. 算数への肯定的態度	3.05	.79	897						—	.40 **	.38 **	.34 **	-.12 **
7. 理科への肯定的態度	3.18	.75	896							—	.47 **	.33 **	-.13 **
8. 社会への肯定的態度	2.87	.84	895								—	.39 **	-.05
9. 地域貢献意欲	2.83	.87	895									—	-.15 **
10. 学年	4.64	1.12	900										—

note: 数値はpearsonの相関係数(両側検定) * $p < .05$ ** $p < .01$

表 8-3 家族とのつながり下位群における学習理解度及び地域貢献意欲を被説明変数とする重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

説明変数/被説明変数	国語への肯定的態度	算数への肯定的態度	理科への肯定的態度	社会への肯定的態度	地域貢献意欲
「住民とのつながり」	.11 **	.13 ***	.20 ***	.19 ***	.32 ***
「家族とのつながり」	.23 ***	.11 **	.10 **	.07 *	.17 ***
「担任教師からの期待」	.17 ***	.15 ***	.14 ***	.20 ***	.16 ***
「他の児童からの支援」	.16 ***	.11 **	.09 **	.14 ***	.13 ***
学年	.09 **	-.07 **	-.07 *	.01	-.07 **
説明率 (R^2)	.21 ***	.13 ***	.15 ***	.17 ***	.33 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 8-2 は、家族とのつながり下位群の児童における各変数の平均値、標準偏差、相関係数を算出したものである。表 8-3 は、下位群の児童における「住民とのつながり」「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」を説明変数、各「教科への肯定的態度」「地域貢献意欲」を被説明変数とした重回帰分析の結果である。

表 8-2 から、家族とのつながり下位群の児童において、「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」、「他の児童からの支援」と、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」の間には、0.22~0.47 の有意な正の相関があることがわかる。

表 8-3 から、家族とのつながり下位群の児童において、「担任教師からの期待」が、国語と理科を除く各「教科への肯定的態度」に、比較的大きな影響を与えていることがわかる。また、「住民とのつながり」が、「理科への肯定的態度」と「地域貢献意欲」に大きな影響を与えていることがわかる。「他の児童からの支援」も、各「教科への肯定的態度」や「地域貢献意欲」に有意な影響を与えている。「家族とのつながり」は、「国語への肯定的態度」に大きな影響を与えている。

また、「国語への肯定的態度」については、「家族とのつながり」が与える影響は大きいものの、「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」で、「住民とのつながり」が与える影響も有意な

め、「家族とのつながり」の少なさを、「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」「住民とのつながり」で、ある程度補うことが可能であることが予想される。

「算数への肯定的態度」については、「家族とのつながり」の少なさを、「住民とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」で、かなりの程度補うことが可能であることが予想される。

「理科への肯定的態度」については、「家族とのつながり」の少なさを、「住民とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」で、かなりの程度補うことが可能であることが予想される。とくに「住民とのつながり」を形成することが、理科への「肯定的態度」を育む上で有効であることが予想される。

「社会への肯定的態度」については、「家族とのつながり」の少なさを、「住民とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」で補うことが、かなりの程度可能であることが予想される。とくに「住民とのつながり」を形成することと、担任教師から期待をかけることが、「社会への肯定的態度」を育む上で有効であることが予想される。

地域貢献意欲については、「家族とのつながり」の少なさを、「住民とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」で補うことが、かなりの程度可能であることが予想される。とくに「住民とのつながり」を形成することが、地域貢献意欲を育む上で有効であることが予想される。

(3) 家族とのつながり上位群の児童における「住民とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が各「教科への肯定的態度」「地域貢献意欲」に与える影響

表 8-4 は、家族とのつながり上位群の児童における各変数の平均値、標準偏差、相関係数を算出したものであ。表 8-5 は、上位群の児童における「住民とのつながり」「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」を説明変数、各「教科への肯定的態度」「地域貢献意欲」を被説明変数とした重回帰分析の結果である。

表 8-4 家族とのつながり下位群の児童における各変数の平均値・標準偏差・相関係数

	M	SD	N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 家族とのつながり	3.84	0.11	1359	—	.20 **	.18 **	.15 **	.20 **	.16 **	.16 **	.11 **	.14 **	-.02
2. 住民とのつながり	3.14	.68	1345		—	.25 **	.26 **	.22 **	.26 **	.28 **	.18 **	.41 **	-.16 **
3. 担任教師からの期待	3.37	.74	1357			—	.29 **	.25 **	.19 **	.21 *	.21 **	.28 **	-.19 **
4. 他の児童からの支援	3.63	.63	1358				—	.24 **	.13 **	.21 **	.20 **	.26 **	-.09 **
5. 国語への肯定的態度	3.57	.47	1356					—	.32 **	.38 **	.45 **	.29 **	-.07 *
6. 算数への肯定的態度	3.65	.51	1355						—	.41 **	.31 **	.23 **	-.19 **
7. 理科への肯定的態度	3.70	.49	1358							—	.42 **	.27 **	-.11 **
8. 社会への肯定的態度	3.57	.56	1354								—	.23 **	-.06 *
9. 地域貢献意欲	3.68	.54	1352									—	-.12 **
10. 学年	4.43	1.11	1346										—

note: 数値はpearsonの相関係数(両側検定) * p < .05 ** p < .01

表 8-5 家族とのつながり上位群における学習理解度及び地域貢献意欲を被説明変数とする重回帰分析の結果（標準偏回帰係数）

説明変数／被説明変数	国語への肯定的態度	算数への肯定的態度	理科への肯定的態度	社会への肯定的態度	地域貢献意欲
「住民とのつながり」	.11 ***	.18 ***	.20 ***	.10 ***	.34 ***
「家族とのつながり」	.13 ***	.10 ***	.08 **	.05	.03
「担任教師からの期待」	.17 ***	.10 ***	.11 ***	.14 ***	.16 ***
「他の児童からの支援」	.14 ***	.02	.11 ***	.12 ***	.11 ***
学年	.00	-.14 ***	-.04	.00	-.03
説明率 (R^2)	.12 ***	.11 ***	.12 ***	.07 ***	.22 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 8-4 から、家族とのつながり上位群の児童において、「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」、「他の児童からの支援」と、各教科への「肯定的態度」、「地域貢献意欲」の間には、0.11～0.41 の有意な正の相関があることがわかる。

表 8-5 から、上位群の児童において、「住民とのつながり」が、算数と理科への「肯定的態度」、「地域貢献意欲」に比較的大きな影響を与えていることがわかる。また、「担任教師からの期待」が、国語と社会への「肯定的態度」に比較的大きな影響を与えている。「他の児童からの支援」も、「算数への肯定的態度」を除く各「教科への肯定的態度」と「地域貢献意欲」に有意な影響を与えている。「家族とのつながり」は、社会を除く各「教科への肯定的態度」に有意な影響を与えている。

(4) 家族とのつながり下位群の児童における「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響と、上位群児童におけるそれらとの比較

表 8-3 と表 8-5 を比較すると、次の 3 点を指摘できる。

第 1 に、家族とのつながり下位群の児童の方が、上位群の児童に比べ、どの被説明変数に対しても、モデルの説明率が高い。つまり、家族とのつながりが少ない児童の方が、「住民とのつながり」、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」の総体が、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響が大きい。よって、モデルの説明率に関して、仮説 2 は支持された。

第 2 に、家族とのつながり下位群の児童の方が、上位群の児童に比べ、「住民とのつながり」が、「社会への肯定的態度」に与える影響が大きい。一方、家族とのつながり上位群の方が、下位群に比べ、「住民とのつながり」が、「算数への肯定的態度」に与える影響が大きい。「住民とのつながり」が、その他の被説明変数に与える影響については、下位群と上位群とで、ほぼ同等である。よって、「住民とのつながり」に関して、「社会への肯定的態度」を被説明変数とした場合を除き、仮説 2 は棄却された。

第 3 に、家族とのつながり下位群の児童の方が、上位群に比べ、「家族とのつながり」「担任教師からの期待」が、各「教科への肯定的態度」、「地域貢献意欲」に与える影響が大きい。よって、「家族とのつながり」および「担任教師からの期待」に関して、仮説 2 は支持された。

4. 考察

本研究の実践的示唆としては、次の4点が挙げられる。

第1に、家族とのつながりが少ない児童については、その少なさが、各「教科への肯定的態度」や「地域貢献意欲」に与える負の影響を、「児童が住民と接する機会を多くすること」や、「担任教師が家族とのつながりが少ない児童に期待をかけること」、「教職員が、学級の他の児童が、家族とのつながりが少ない児童を支援するように働きかけること」によって、ある程度補いうる事が予想される。

第2に、家族とのつながりが少ない児童に対して担任教師が期待をかけることは、そうした児童の各「教科への肯定的態度」を高める上で、とくに有効であることが予想される。

第3に、家族とのつながりが少ない児童に対して「児童が住民と接する機会を多くすること」は、各教科、とくに「社会への肯定的態度」を高める上で、有効であることが予想される。

第4に、家族とのつながりが多い児童に対して「児童が住民と接する機会を多くすること」は、そうした児童の各教科、とくに「算数への肯定的態度」を高める上で、とくに有効であることが予想される。

本研究の研究上の示唆としては、次の2点が挙げられる。

第1の示唆は、「児童が住民と接する機会の多少」「担任教師からの期待」「他の児童からの支援」が、各「教科への肯定的態度」に与える影響について、家族とのつながりが少ない児童と、それが多い児童の間で、教科ごとに少なからず違いがあることを明らかにしたことである。

第2の示唆は、家族とのつながりの程度に関わらず、「児童が住民と接する機会を多くすること」は、児童の「地域貢献意欲」に大きな影響を与えることを明らかにしたことである。

〔参考文献〕

- 志水宏吉・中村瑛仁・知念渉 (2012). 「学力とソーシャル・キャピタル―「つながり格差」について」志水宏吉・高田一宏編著『学力政策の比較社会学【国内編】―全国学力テストは何をもたらしたか』明石書店.
- 露口健司 (2016a). 『ソーシャル・キャピタルと教育―「つながり」づくりにおける学校の役割―』ミネルヴァ書房.
- 露口健司 (2016b). 「子どもを取り巻く『つながり』と学習意欲の関係」『愛媛大学教育学部紀要』63, 1-12.
- 仲田康一 (2015). 『コミュニティ・スクールのポリティクス』勁草書房.
- 鍋島祥郎 (2003). 『効果のある学校―学力不平等を乗り越える教育』部落解放人権研究所.